



(財)人形浄瑠璃因協会主催 第99回女義太夫公演(2009年2月) 女流義太夫:竹本友香 三味線:豊澤雛文

「咲くやこの花賞」受賞を 弾みに女流義太夫の 普及・発展を

三味線で太夫が語る音曲「義太夫節」。この義太夫節に人形を加えて演じるのが文楽(人形浄瑠璃)である。文楽は男性の芸能だが、女性だけで演じる「女流義太夫(女義)」も長い歴史を刻んでいる。女義の三味線弾きで、2008年度「咲くやこの花賞」に輝いたのが、豊澤雛文さん(40歳)だ。

おのずと伝統芸能の道へ

三味線弾きの曾祖父母や祖父、太夫の祖母らのもと、幼いころから伝統芸能に囲まれて生活していた。実際に足を踏み入れたのは意外に遅く、高校を出てから。「楽器が好きだったので、母の勧めもあって胡弓と三味線を習い始めた」。そこで三味線の魅力に目覚め、半年後には女義の豊澤雛代師匠に入門。

豊澤雛文と名乗り、1988年に人形浄瑠璃因協会女子部公演「増補忠臣蔵」本蔵下屋敷の段の琴で初舞台を踏む。「初めのうちはお琴や胡弓を弾くことで舞台上に慣れていく。師匠には『太棹の音に負けないように力を入れて弾きなさい』と言われ苦労した」

入門当時、すでに60代後半だった師匠。「あなたが半人前になるまで私は生きてられへんかもしれへんけど、やるんやったらやり」と20年間、2007年に亡くなるまでけいこをつけてくれた。「めったにほめてくれず、とても厳しかった。でもわが子のように可愛がってくれた」

歴史を刻んできた女流義太夫

女性による義太夫語りは江戸時代から見られ、天保の改革で女性芸能が禁止されたものの、1877年「寄席取締規則」により復活。明治時代後期には豊竹呂昇や竹本綾之助ら大スターが生まれ、最盛期を迎える。昭和に入ると、戦争や災害などで廃れていった。

現在は「女流義太夫」という呼び名が一般的だ。太夫1人と三味線1人による素浄瑠璃が基本で、衣装は男性と同じように肩衣と袴を着る。三味線は大型で音域が低い太棹を使用。

力が要りそうだが「例えば腕相撲して勝つか」といってそうでもない。使う筋肉が違う。師匠の音量には敵わない。力ではなく、技量と経験が音を決める。

三味線弾きも、まずは太夫の語りを覚えるという。そして相方の太夫にそって、音で情景を表現していく。「昔から残っている物語はともよくできていて、活字を読んだだけでも感動する。それを太夫と三味線によってイメージを膨らませ、聴き手にいかに想像していただけるかということが難しくもあり面白いところ」

受賞を励みに普及活動にも力を

女義が所属する財団法人「人形浄瑠璃因協会女子部」には現在約30人の太夫、40人の三味線弾きがいる。しかし公演の機会も限られ、なかなか世間一般に女義の文化を伝えられない。そんな状況の中、「咲くやこの花賞」の受賞の知らせが舞い込んだ。

同賞は、創造的な芸術活動を通じて大阪文化の振興に貢献し、かつ将来の大阪文化を担う人材に対して贈られるもの。「太棹らしい重厚な音色に繊細さを併せもつ演奏で将来性を感じさせ、今後の活躍が大いに期待される」と評価された。「もっと頑張りなさい」という賞だと思っている」と謙虚に受け止め、「世間に女義の存在を知っていただけるいい機会になった」と喜ぶ。

公演は因協会の舞台(年2回)が主である。それ以外にも、「庶民の娯楽だった昔のように、少人数のお客さんの前で身近に感じてもらえるような公演ができれば。一緒にやっている太夫の竹本友香さんと、いつも夢を語り合っている」。受賞を、女義界の発展のために尽くす“委任状”と受け止め、「何とかして、私の後にも女義の文化を遺していくため、貢献したい」と約束する。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

プロフィール

義太夫三味線奏者

とよざわ ひなぶみ
豊澤 雛文さん



1968年豊中市生まれ。87年に豊澤雛代に入門、豊澤雛文と名乗る。人形浄瑠璃因協会賞の奨励賞(93、95、97年度)、女子部門奨励賞(2002年度)、女子部門賞(05年度)、大阪市「咲くやこの花賞」(演劇・舞踊部門)(08年度)など受賞。07年から野澤錦糸の預かりとなる。主な活動は、人形浄瑠璃因協会女子部公演、若手女流義太夫勉強会「筈会」など。